

キャンプ経験が児童の自己概念と 一般性自己効力に及ぼす影響

関根章文・飯田稔

The effect of camp experience upon self-concept and general self-efficacy of school children

SEKINE Akifumi and IIDA Minoru

The purpose of this study was to examine the effect of camp experience upon self-concept and general self-efficacy in elementary school children who participated in a 7-day camp conducted in 1993. Subject were 54 participants from 5th to 6th graders.

Self-concept and general self-efficacy were measured with the Childrens Self-Actualization Scale (CSAS) and General Self-Efficacy Scale for Children (GSESC) administered at the beginning and the end of the camp.

The following results were obtained ;

1. The camp participants improved in self-concept, particularly in the category of Achievement Motivation and Self-Effort, between the beginning and the end of the camp.
2. There was no improvement in general self-efficacy through the camp.
3. Both CSAS scores and GSESC scores were significantly correlated at both the beginning and the end of the camp.
4. The high group of perceived general self-efficacy at the beginning camp showed significantly higher self-concept than low group, and improved in the sub-scale of Self-Effort.

Key words : Camp, Self-concept, General self-efficacy

はじめに

教育キャンプの目的として、自己の発達、人間関係の改善、自然環境の認識があげられている¹⁸⁾。その中の自己の発達に関するキャンプの効果研究の従属変数としては、自己概念と自己統制感 (Locus of Control) が数多く報告されている⁷⁾。

一般に自己概念は、その人の行動を規定する内的準拠枠といわれ、人が自分自身をどのようにとらえているかによって、その人の行動様式が決定されてくる。特に人が日常生活の中で次々に取り組んできた課題をどの程度成功裏に達成してきたかという成功・失敗経験と、その課題達成を通じ

てどの程度周囲の人から評価され承認されてきたかという承認・否認経験の積み重ねによって自己が発達してくる。非日常生活であるキャンプ経験により、この自己概念の変容を報告している研究として、不安との関係からみたもの^{3,4,6)}、また人間関係との関連からとらえたものがある^{8,9)}。

最近新たな変数として注目されているバンデューラ (Bandura) の提唱した自己効力 (Self-Efficacy) 理論は、適切な行動をうまくできるかどうかという個人的な確信である^{1,2,16,20)}。自己効力を個人がどの程度身につけているかを認知することが、その個人の行動を予

測する要因と解釈されている。自己効力の一般性の次元に注目した研究^{14,15,17)}もあり、坂野・東條¹²⁾は、一般性自己効力とは、個人がさまざまな場面において自己の行動の遂行可能性についてどのような見通しを持って行動を生起させているかの目安となる変数であると定義している。飯田・関根⁵⁾やKolb¹¹⁾は、この一般性自己効力に着目し、キャンプ経験による影響を報告している。また関根¹³⁾は自己統制感との関連を通して、一般性自己効力のキャンプ経験による変容をみている。

キャンプ経験による自己概念と一般性自己効力への影響を同時に実験した研究は少なく、Wright¹⁵⁾はテネシー自己概念尺度 (Tennessee Self Concept Scale) と一般性自己効力を測定する GESS (Generalized Expectancy for Success Scale) を OBS (Outward Bound School) に参加した非行少年を対象に測定している。両変数ともプログラム前後で比較して有意に向上したことを報告しているが、両変数の関係にはふれていない。わが国では、キャンプ場面における自己概念と一般性自己効力の関係と変容に関する研究は端緒にすぎないばかりである。

本研究では、キャンプに参加した小学校高学年児童を対象に、次の研究課題を設定した。

1. キャンプ経験が参加児童の自己概念に及ぼす影響を検証する。
2. キャンプ経験が参加児童の一般性自己効力に及ぼす影響を検証する。
3. 自己概念と一般性自己効力の関係について検証する。

方法

1 対象

1993年8月に幼少年キャンプ研究会が主催したキャンプの参加者である、小学校5・6年生54名を被検者とした。学年、性別の内訳は表1の通りである。

	小5	小6	計
男子	20	12	32
女子	18	4	22
計	38	16	54

2 キャンプの概要

6泊7日の日程で宮城県栗原郡花山村にある同

研究会所有の花山キャンプ場で実施された。キャンプ生活は、テントで寝袋を使用して宿泊し、主に自炊による原始的キャンプの形式をとっている。キャンパーは6もしくは7名からなる男女学年混合のグループにより生活班が編成され、各班に野外運動専攻の大学生または大学院生をカウンセラーとして1名ずつ配置している。

キャンプでの主要なプログラムは、仲間づくりゲーム、沢登りと山中での宿泊を含む1泊2日の登山、個人別活動、環境教育プログラム、キャンプファイヤーで構成されている。

3 検査および手続き

1) 自己概念

キャンプ前後における児童の自己概念の変容をはかるために、梶田¹⁰⁾が作成した自己成長性検査 (CSAS) 31項目の評定尺度を3件法から5件法に修正したものを採用した。この検査は、自己形成および自己実現に関する態度や意欲を測定するもので、達成動機、努力主義、自信と自己受容、他者のまなざしの意識の下位尺度から構成されている。

2) 一般性自己効力

坂野・東條¹²⁾が成人用に開発した16項目2件法の一般性セルフ・エフィカシー尺度をもとに飯田・関根⁵⁾が児童用に修正した児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度 (GSESC) を使用した。15項目5件法で、得点可能範囲は15~75で、得点

表2 CSAS 得点の比較

	N	キャンプ前		キャンプ後		t
		M	SD	M	SD	
<CSAS得点>						
全体	54	102.4	12.32	104.0	13.35	1.73*
男子	32	105.4	13.1	107.1	13.90	1.28
女子	22	98.0	9.76	99.4	11.32	1.22
<達成動機>						
全体	54	28.4	4.47	29.5	4.55	3.04**
男子	32	29.2	4.58	30.6	4.70	2.58*
女子	22	27.2	4.13	28.0	3.92	1.58
<努力主義>						
全体	54	32.4	4.53	33.9	4.66	2.78**
男子	32	32.8	5.16	34.4	5.27	2.01*
女子	22	31.8	3.43	33.0	3.57	2.17*
<自信と自己受容>						
全体	54	24.1	4.43	23.5	4.88	-1.42
男子	32	25.0	4.60	24.4	5.38	-0.90
女子	22	23.0	3.97	22.3	3.82	-1.20
<他者のまなざしの意識>						
全体	54	23.2	4.35	22.8	4.67	-0.87
男子	32	24.3	4.21	23.6	4.72	-1.07
女子	22	21.5	4.09	21.6	4.45	0.40

* p<.10 ** p<.05 *** p<.01

が高いほど一般性自己効力が強いことを示す。そして失敗に対する不安、行動の積極性、能力の社会的位置づけの下位尺度が含まれている。

両調査ともキャンプ前(初日)とキャンプ後(最終日)の2回実施した。

結果と考察

1 自己概念

キャンプ経験による自己概念への影響をみるために、キャンプ前後のCSAS得点を比較したのが表2である。その結果、キャンプ経験により有意性傾向で向上したことが認められた ($t=1.73$, $df=53$, $p<.10$)。特に「達成動機」($t=3.04$, $df=53$, $p<.05$)と「努力主義」($t=2.78$, $df=53$, $p<.05$)において顕著な向上がみられた。キャンプの影響を性別でみると、男子は「達成動機」($t=2.58$, $df=31$, $p<.05$)と「努力主義」($t=2.01$, $df=31$, $p<.10$)において、女子は「努力主義」($t=2.17$, $df=21$, $p<.05$)の得点に向上がみられた。

以上の結果、キャンプ経験は参加児童の自己概念を高める傾向があり、特に「自分の能力を最大限に伸ばせるよういろいろなことをやってみよう」、「他の人にはやれないようなことをやりとげたい」などに代表される「達成動機」に関わる自己概念と、「一度自分で決めたことは途中でいやになってもやり通すよう努力する」、「他の人に認められなくても、自分の目標に向かって努力したい」などに代表される「努力主義」に関係する自己概念を向上させるのに効果がみられた。この結果は、冒険プログラムに参加した小中学生の自己概念の変容を検討した飯田ら³⁾の研究や、フロンティア・アドベンチャー参加者の自己概念を検討した井村ら^{8,9)}の研究結果とほぼ一致するものであった。ただし、女子の方に顕著な効果があったことを報告している研究が多い中、本研究では特に「達成動機」の男子に顕著な向上がみられた。男子の「達成動機」向上を表しているキャンプ中の出来事として、登山中の宿泊形態を自己選択させた6年生の場合、ソロビバークに挑戦したのは男子のみで、女子はすべてテント泊を希望していることがあげられる。つまりすべてのキャンププログラムを全員が同じように体験したわけではなく、個人別選択活動など個人の要求、積極性に依る活動が含まれていたため、意欲の高い男子は

挑戦する課題を選択し、やる気をより助長したと考えられる。ただし、プログラムへの参加形態、男女の割合など実験設定を密にして、さらなる検討が必要である。

男女ともに有意に向上した「努力主義」に関しては、登山の影響が大きいと考えられる。沢登りと山中での宿泊を含むこの登山は、各自が10kg前後の荷物を背負い、5年生が16km、6年生が24kmの行程である。キャンプ後の感想文では、「こんなけわしい道をほくもみんなも、よくがんばったなと思いました。」「一人一人が苦しみながら登っていきました。すべったり、ころんだり、ドロにはまってしまっても、みんなではげまし合ってがんばりました。」と書かれていた。この克服型の成功体験を通して、参加した児童は「努力主義」に関する自己概念を獲得したことが伺える。

2 一般性自己効力

キャンプ経験による一般性自己効力への影響をみるために、キャンプ前後のGSESC得点を比較した。キャンプ前が46.6 (SD=9.62)、キャンプ後が47.3 (9.50)であったが、有意な向上は認められなかった。男女別にキャンプ前後の比較もおこなったが、同じく有意な変容はみられなかった。

以上の結果、キャンプ経験による児童の一般性自己効力の向上は認められなかった。

この結果は、6年生を対象に4ヶ月間の野外体験コース (Outdoor Experiential Training) による一般性自己効力への影響を調べたKolb¹¹⁾の研究結果を支持するものであった。また向上を報告した飯田・関根⁵⁾と結果は異なり、その理由についてさまざまな角度から分析したが特定することができなかった。

3 一般性自己効力と自己概念の関係

自己概念と一般性自己効力の関係をみるために、CSAS得点とGSESC得点の相関係数を求めたところ、キャンプ前、キャンプ後ともに有意であった ($pre: r=.64$, $p<.001$, $post: r=.86$, $p<.001$)。したがって、自己概念と一般性自己効力には高い相関関係が認められた。

次に一般性自己効力の認知程度と自己概念の関係をみるために、キャンプ前のGSESC得点の上下約30%を高GSE群と低GSE群に分けてCSAS得点を比較した結果が表3である。キャンプ前後

ともに高GSE群の方が有意に高い値を示した。また下位尺度すべてにおいても、キャンプ前、キャンプ後ともに高GSE群の方が低GSE群を有意に上回っていた。

表3 低GSE群と高GSE群によるCSAS得点の比較

	N	キャンプ前		キャンプ後		t
		M	SD	M	SD	
<CSAS得点>						
低GSE群	21	94.0	11.18	94.4	10.97	0.31
高GSE群	16	113.5	6.09	117.4	8.14	2.48**
t		6.31***		7.03***		
<達成動機>						
低GSE群	21	25.2	4.17	25.8	3.27	0.85
高GSE群	16	31.8	2.17	33.0	2.97	1.62
t		5.73***		6.94***		
<努力主義>						
低GSE群	21	30.4	4.79	31.1	4.02	0.82
高GSE群	16	35.6	3.31	37.8	3.94	2.76**
t		3.67***		5.08***		
<自信と自己受容>						
低GSE群	21	21.3	3.72	20.9	3.60	-0.60
高GSE群	16	27.1	3.85	27.6	4.84	0.56
t		4.66***		4.80***		
<他者のまなざしの意識>						
低GSE群	21	21.9	4.04	21.7	4.27	-0.35
高GSE群	16	25.6	3.74	25.8	4.66	0.20
t		2.90**		2.77**		

** p<.01 *** p<.001

さらに、キャンプ前における一般性自己効力の認知程度がキャンプによる自己概念の変容に及ぼす影響をみるために、高GSE群と低GSE群別に対応のあるt検定でキャンプ前後のCSAS得点を比較した結果、高GSE群に有意な向上が認められた ($t=2.48$, $df=15$, $p<.01$)。また、下位尺度では「努力主義」が有意に向上していた ($t=2.76$, $df=15$, $p<.01$)。しかし低GSE群では、CSAS得点と下位尺度のいずれにおいても、変容はみられなかった。

以上の結果から明らかになったことは、キャンプ前に一般性自己効力を高く認知するものは、低く認知するものよりも自己概念を高く認識していた。またキャンプ前に一般性自己効力を高く認知するものには、キャンプ経験を通して「努力主義」に顕著な効果がみられた。

一般性自己効力を高く認知するものの特徴として、さまざまな場面で自己の行動の達成可能性に対する見通しが高いこと、具体的には多くの努力を払い、嫌悪的もしくは葛藤的な状況に長く耐えられることがあげられる¹²⁾。本研究では、キャンプ前に一般性自己効力を高く認知するものは、低く認知するものよりも自己概念が高いことか

ら、自らの現状を乗り越え、何らかの方向へと自己形成していくということや自己実現に関する態度や意欲も旺盛なことが明らかになった。つまり物事に対するやる気や、困難な課題でも最後まで努力すれば達成できるといった意識、自らの現状への冷静な意識、そして他者から自分に向けられる評価に対するある程度の意識を持っているということである。

またキャンプ経験により高GSE群の「努力主義」に顕著な効果がみられたが、一般性自己効力を高く認知していたキャンパーは、キャンプ中により多くの努力を払い、克服型プログラムの登山で代表される葛藤的な状況に耐えたのち、成功体験を得るとともに「努力主義」をより一層獲得したと推測される。

結 論

本研究の目的は、キャンプ経験が参加児童の自己概念と一般性自己効力に及ぼす影響と、さらに自己概念と一般性自己効力との関係を明らかにすることであった。

小学校5・6年生を対象に、1泊2日の登山をメインプログラムとする7日間のキャンプを実施した。自己成長性検査と児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度を用いて分析した結果、次の結論を得た。

- 1) キャンプ経験によって参加児童の「達成動機」と「努力主義」に関連する自己概念が向上する。
- 2) キャンプ経験による参加児童の一般性自己効力の変容はみられなかった。
- 3) 自己概念と一般性自己効力には高い相関がある。
- 4) キャンプ前に一般性自己効力を高く認知するものは自己概念も高く、キャンプ経験を通して特に「努力主義」に関連する自己概念で顕著な向上を示した。

今後の課題として、1. 自己概念および一般性自己効力とプログラムとの関連、2. キャンプ経験による自己概念や一般性自己効力の変容と日常生活場面での行動変容、3. 発達段階別による比較について研究を進める必要がある。

引用文献

- 1) Bandura A (1977) : Self-Efficacy ; Toward

- Unifying Theory of Behavioral Change, *Psychological Review* 84 (2) : 191-215.
- 2) バンデューラ (1985) : 自己効力 (セルフ・エフィカシー) の探求. (訳) 重久 剛, (編) 祐宗省三他, 「社会的学習理論の新展開」, 金子書房, 東京, pp. 131-141.
 - 3) 飯田 稔・井村 仁・Betty van der Smissen (1986) : 冒険キャンプにおける小中学生の自己概念と不安の変容. 筑波大学体育科学系紀要 9 : 91-101.
 - 4) 飯田 稔・井村 仁・影山義光 (1988) : 冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容. 筑波大学体育科学系紀要 11 : 79-86.
 - 5) 飯田 稔・関根章文 (1992) : キャンプ経験が児童の一般性自己効力に及ぼす効果. 筑波大学体育科学系紀要 15 : 93-102.
 - 6) 井村 仁 (1982) : アドベンチャー・プログラム経験が中・高校生の自己概念と不安に及ぼす影響. 筑波大学体育科学系紀要 5 : 59-70.
 - 7) 井村 仁 (1987) : 冒険プログラムが自己の発達に及ぼす効果に関する文献的研究. レクリエーション研究 17 : 21-28.
 - 8) 井村 仁・小島 哲・諸澄敏之 (1990) : フロントニア・アドベンチャー経験が参加者の自己概念と集団凝集性に及ぼす影響. 筑波大学体育科学系運動学研究分野運動学研究 6 : 77-85.
 - 9) 井村 仁・小島 哲・寄金義紀・飯田 稔・吉田 章・橘 直隆 (1992) : フロントニア・アドベンチャー事業に関する評価研究—参加者に関わる評価を中心に—. 筑波大学体育科学系紀要 15 : 103-117.
 - 10) 梶田 毅一 (1988) : 自己意識の心理学 (第2版). 東京大学出版会, 東京,
 - 11) Kolb DC (1993) : General Self-Efficacy and Outdoor Experiential Training. Doctoral Dissertation, Georgia State University.
 - 12) 坂野雄二・東條光彦 (1986) : 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み. 行動療法研究 12 (1) : 73-82.
 - 13) 関根章文 (1994) : キャンプ経験が児童の Locus of Control と一般性自己効力に及ぼす影響. 筑波大学体育科学系紀要 17 : 177-183.
 - 14) Sherer M, Maddux JE, Mercandante B, Prentice-Dunn S, Jacobs B & Rogers RW (1982) : The Self-Efficacy Scale : Construction and Validation. *Psychological Reports*, 51 : 663-671.
 - 15) Sherer M & Adams CH (1983) Constructs Validation of the Self-Efficacy Scale. *Psychological Reports* 53 : 899-902.
 - 16) 竹網誠一郎・鎌原雅彦・沢崎俊之 (1988) : 自己効力に関する研究の動向と問題. 教育心理学研究 36 (2) : 172-184.
 - 17) Tipton RM & Worthington EL (1984) : The Measurement of Generalized Self-Efficacy : A Study of Construct Validity. *Journal of Personality Assessment* 48 (5) : 545-548.
 - 18) van der Smissen B (1975) : The Dynamics of Reseach. (Eds.) van der Smissen B, (In) *Research Camping and Environmental Education*, The Pennsylvania State University, pp. 5-17.
 - 19) Wright AN (1982) : Therapeutic Potential of Outward Bound Process ; An Evaluation of a Treatment Program or Juvenile Delinquents. Doctoral Dissertation, The Pennsylvania State University.
 - 20) 安永 悟 (1985) : 自己効力感と内発的動機づけ. 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門) 30 (2) : 23-34.